談叢

水滸傳の地理雜觀

如舟老人

前稿を草した後に胡適氏の上海亞東圖書館發行の活板本に冠した水滸傳考及び後考を讀んで水滸傳なる小說が南宋に行はれた小說宣和遺事から出て、明初に羅貫中弘治正德間に施耐庵などが潤色して大成し、嘉靖頃の郭武定百回本が今日現存する最古本で、今の忠義水滸傳百十回本或は百二十回本が明末淸初に出來、我々の手に入り易い金聖歎七十回本は施耐庵舊七十回から出たものたるを知つた。今我々の讀むに便なるのは此の上海活字本で、コンマ、セミコロン、疑問標叫呼標等を施した新式句讀法を用ゐてゐるから、文章の脈絡、說話の語氣を明瞭に知る事が出來て、支那の時文白話に慣れぬ我々でも此の新式句讀によつて大意が分るから面白い。

支那の田舍の風景とその生活が第一回王敎頭私走延安府、九紋龍大鬧史家村に先づ描寫されてゐる，王進が高俅の迫逼に堪へずして汴京から陝西省の延安府に逃げる途中潼關の西の華陰縣を經ていつたのは大體順路である。此處で日を暮らした王進母子が林中の燈光を認めて史家村の九紋龍史進の家に辿り着く處に

當時轉入林子裏來看時、却是一所大院、一週遭都是土牆．牆外却有二三百株大柳樹林、當時王敎頭來到莊前、敲門多時

といふのは北支那の田舍の莊屋の居宅を想見せしめるに足る。

其の次に少華山三人組の山賊の一人陳達が華陰縣を劫掠する順路として史家村を通らんとするに當つて、

史進聽得、就莊上敲梆子來、那莊前莊後莊東莊西、三四百家莊戶、聽得梆子響、都拖鎗拽棒、聚起三四百人、一齊都到史家莊上、

といふ句がある。これは地方豪民の莊宅を中心とした村落の保甲の仕組になつた自衛團で、日本で近頃地方に組織された青年團よりも整頓した仕組を語るものである。支那の地方行政の完全な警察機關を缺いた狀態は何時の世も同一で必要が産んだ組織であつて、今も胸に民壯とか民勇といふ紅布標を着けて原始的な銃器を持つた團體を見る光景がまた此に現はれて來る。史進が赤い馬に乘て繰り出す時に

前面擺着三四十壯健的莊客、後面列着八九十村蠢的鄉夫及史家莊戶、都跟在後頭、一齊吶喊、直到村北路口

といふのはこの民壯とか民勇といふものゝ、老少勇怯の混合した集團を表はすものである。

この史進よりも遥かに大きな豪族の居宅は第八回に豹子頭林冲が尋ねて行く滄州に近い橫海郡の小旋風柴進の

大石橋邊、轉灣抹角、那個大莊院卽是

で、綠柳の陰中にあつて濶い河を遶らし、その兩岸に垂楊の大樹生ひ茂り、樹陰に粉牆があるといひ、第二十一回に宋江の尋ねて行つた時には

大官人在東莊上收租米、不在莊上

といつて別莊のやうな東莊に案內されて、其處に食客となつた武松に逢ふ處など廣い居宅を幾つも持つた有福な生活が窺はれる。

又た鄆州の梁山泊に近い祝家莊、扈家莊、李家莊の三村は並せて一二萬の軍馬人家があるといひ、第四十六回に楊雄石秀の兩人が杜興に案內されて行つた李應の李家莊は

眞個好大莊院、外面週迴一遭闊港、粉牆傍岸有數百株合抱不交的大柳樹、門外一座吊橋、接着莊門、入得門、來到廳前、兩邊有二十餘座槍架、明晃晃的、都揷滿軍器

といふいかめしい防備を具へて、梁山泊に近いだけ、自衛團が更に大仕掛になつてる。

これ等の村落の模樣は支那に固有な形式で、日本に隋唐の文物を輸入して都市計畫を奈良に行ひ耕地を整理して班田條里の制度を作つた時に、日本にも行はれたものである。

その中に日本の村落を記述する時に詳述するが奈良附近に見る溝を遶らした長方形の村落は當時の遺物であつて、四方に各一つの門を設けて朝夕開閉する仕組なども管子などに見えた所がそのまゝ隋の頃に行はれ、令を下して障を築いて盜賊を防がせたのを模倣してゐると想はれる。然るに日本では此の模倣に止り實際に必要がない仕組は永くは續かずに廢れてたのである。

史進が魯智深に渭州府で逢ひ、魯智深がまた雁門縣に行つた時に登る酒樓なるものに至つて江南にはあつて、北支那の市街で滅多に見ない二階造りで、作者の南人なるが爲めに何處にもある積りで書いたらしい。

第五十五回吳用使時遷偷甲、湯隆賺徐寧上山の章に、竊盜の名人時遷が徐寧の家に忍び込み雁翎鎖子甲を偷む記事は全書中に於て支那家屋の構造を描寫して精細を極めた文字である。が此の東京(汴京)官人の住宅もまた二階造りになつて、時遷は所謂梁上の君子となつて樓上に寢た下女二人の屋根裏に吊した鎧櫃を偷んで、未明に御幸の騷ぎに紛れて城門を出ることになつてる。此の開封府の家屋の二階造りもまた恐らくは間違てゐるらしい。

何故北支那に二階屋がないかといふ理由に至つては極めて簡單で、平地が廣く宅地を局限する必要ない爲めではなく、全く氣候の關係に在ると考へられる。冬季四ヶ月以上零度以下の酷寒が續くのであるから、燃料の經濟的で完全な煖房裝置として黃河以北何處にも見るのは朝鮮で溫突と呼ぶ炕(カン)に超えたものはない。此の煖牀裝置は室外の燒き口から焰と烟を土間の下の暗渠を通して烟突に導くもので、燃料は何でもよいから、高粱の稈でも牛馬矢でもかまわぬ。二階屋を設けて火鉢の如き木炭を燃料としたものを設けるのは不可能であるからそんな構造は先づ北京邊の贅澤な料理屋の外にはあるまい。熱河で一軒二階屋の料理屋があつたかと記憶するが、若しあつたらば淸朝の避暑宮に大官の扈游する時代の遺物に過ぎまい。(第一稿)